

# ちば・谷津田フォーラム 里やまの自然誌



育雛中の野生のトキ(1985年中国陝西省洋県 提供:蘇雲山)

## 目次

ちば・谷津田フォーラムシンポジウム第9回シンポジウム 「朱鷺(トキ)が舞う千葉の谷津田に！」報告 .....	1
2003年度活動実績 .....	19
谷津田ファイル .....	20
事務局より .....	23

題字：倉島貴浩(ワークホーム里山の仲間たち)

イラスト：松下優子

## ちば・谷津田フォーラムシンポジウム第9回シンポジウム

# 「朱鷺(トキ)が舞う千葉の谷津田に！」報告

2004年 2月21日、ちば・谷津田フォーラムシンポジウム第9回シンポジウム「朱鷺(トキ)が舞う千葉の谷津田に！」が、千葉県立中央博物館 1階講堂にて開催されました。

例年の谷津田保全に関する事例発表やパネル展示に加えて、特に今回は、中国でのトキ研究の第一人者である蘇雲山氏をお招きして、中国でのトキの状況や千葉県でのトキ生息の可能性など、その生態や農業とのかかわりなどさまざまな観点から論議が展開されました。

トキを象徴として谷津田保全について考えるというテーマへの関心の高さからか、県内各地はもとより、東京都、茨城県、埼玉県、横浜市、山梨県などから110名の参加があり、活発な意見交換が行われました。以下にその内容をご報告いたします。なお、今回の報告の講演記録の作成にあたっては、満生朋子氏、桑波田和子氏はじめ講演者の皆さんに大変お世話になりました。感謝申し上げます。

### 【プログラム】

- 9:30～ 受付
- 10:00～10:05 あいさつ ちば・谷津田フォーラム代表 中村 俊彦
- 10:05～12:10 . 県内の谷津田をめぐる取り組み事例発表(司会:田中 正彦)
- 10:05～10:20 1. 大草谷津における東邦大学の活動  
谷川 正樹(東邦大学大学院理学研究科生物学専攻地理生態学研究室)
- 10:20～10:35 2. 私なりの谷津田とのかかわりかた  
小西 朝希子(江戸川大学社会学部環境情報学科)
- 10:35～10:55 3. 千葉市の谷津田等の保全推進に関する取り組みについて  
佐久間 紀行(千葉市環境局環境保全推進課)
- 10:55～11:10 4. 蘇れ!ふるりの谷津田 ～30年放棄された谷津田の再生を目指して～  
渡辺 英二(茂原農業高校), 茂原農業高校農業土木科生徒
- 11:10～11:25 5. 松尾町における豊岡たんぼの学校に対する取組みについて  
所田 吉泰(松尾町役場産業課農村整備係)
- 11:25～11:40 6. 開発で消えた船橋市坪井谷津 ～坪井地区特定土地区画整理事業～  
高山 清隆(グループ 谷津田の番人)
- 11:40～11:55 7. 丸山町の里やま・里うみ発見  
第8回シンポジウム「ちば・谷津田フォーラム in 丸山町」報告  
遠藤 イサム(ぼんた里やまの会代表)
- 11:55～12:10 8. 我孫子市岡発戸・都部の谷津について  
田中 房江(岡発戸・都部の谷津を愛する会)
- 12:10～13:30 昼食休憩・交流タイム・パネル発表展示見学
- 13:30～16:10 . シンポジウム「朱鷺(トキ)が舞う千葉の谷津田に！」(司会:川本 幸立)
- 13:30～13:45 趣旨説明「なぜ千葉で朱鷺か!」: 中村 俊彦(ちば・谷津田フォーラム代表)
- 13:45～14:45 講演1「中国のトキの保護と生態農業」: 蘇 雲山(日中朱鷺保護研究会)
- 14:45～14:55 コメンテーター1: 荒尾 稔(日本雁を保護する会)
- 14:55～15:00 休憩
- 15:00～15:30 講演2「朱鷺とサケの里やま再生を目指して」  
所 英亮(多古町桜宮自然公園をつくる会)
- 15:30～15:40 コメンテーター2: 小西 由希子(NPO法人 ちば環境情報センター代表)
- 15:40～16:10 全体質疑・意見交換
- 16:10 閉 会
- パネル発表展示はロビーにて終日

先週は、千葉県が主催した「里山勉強会」がここ中央博物館で開催されました。多くのスタッフは2週連続で少しつかれているかもしれませんが、よろしくお願いたします。

「ちば・谷津田フォーラム」は、1999年9月4日、千葉市の蘇我駅近くにある勤労市民プラザでのある会合の後に、谷津田の保全ための情報交換、交流の場等が必要と言う機運の基に設立された会です。それ以来、私は、代表として、ずいぶん長く活動してきたように思います。期間的には、まだ発足して5年弱ですが、今回のシンポジウムはもう9回目になりました。

今回は、午前の谷津田にかかわる様々な取り組みと、午後は、トキのシンポジウムを予定しています。トキについては専門家をお呼びし、お話をお聞きすることになりました。中国の研究者の蘇雲山さんです。蘇雲山さんは、「蘇る雲と山」と書きます。大変楽しみです。

ところで、田中正彦さんが、数年前にコンピューターで「谷津田」を検索したら、ちば・谷津田フォーラム1件しかなかったそうです。今ではコンピューター検索すると谷津田は5260件、里山では約21



万件もヒットします。この5年間に谷津田、里やまに関する社会の認識が大きく変わってきていると感じます。ちなみに、谷津田の検索では、群馬県の「ふるさと谷津田再発見プロジェクト」が1番目で、ちば・谷津田フォーラムは2番目でした。千葉県の里山条例が発足し、県行政も里山、谷津田の保全に向けての動きが出てきました。今日は、谷津田についての情報交換や議論を一日たっぷりおこないたいと思いますので、どうぞ皆さんよろしくお願致します。



## ．県内の谷津田をめぐる取り組み事例発表

### <事例発表>

#### 1. 大草谷津における東邦大学の活動

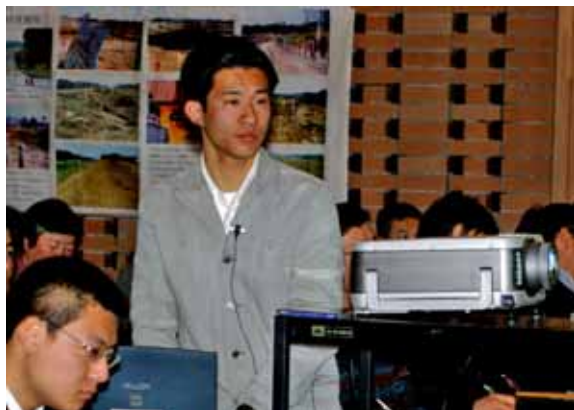
東邦大学大学院理学研究科生物学専攻地理生態学研究室 谷川 正樹

千葉市を流れる支川都川に接する、約80haの大草谷津は、北は住宅地に接し、台地上は一部が住宅地になっているもののその大部分は林です。東邦大学生物学科の学生は、この大草谷津を研究のフィールドとして、卒業研究を行ってきました。また、1999年よりニホンアカガエルの産卵場所の回復を目的として、復田を行っており、千葉コープや地元の方と共同で、おおくさ倶楽部として田んぼの作業や収穫したもち米での餅つきなど行っています。

大草谷津を調査地としたこれまでの卒業研究は以下の通りです。ニホンアマガエル *Hyla japonica* 幼生の成長に伴う食性の変化と日周行動(栗和田2001)、里山における土地利用計画案の検討(小川2002)、千葉市の谷津田内における直翅目の分布:土地利用と直翅目の関係(谷川2002)、両生類に注目したピオトープの環境評価とその実験的検討(鈴木2002)、ニホンアカガエルの生息地適合性評価手法の開発:

体温調節行動に注目して(和田 2003), 里山における簡易な土壌環境測定法の検討(山岸 2003), 千葉市の里山に生息する筒筈巢性ハチ相:17年前との比較および場所による違い(安楽 2004), ニホンアカガエルの生息地適合性評価手法の開発 :ニホンアカガエルとスポンジモデルにおける水分収支の関係(中島 2004)。

田んぼの作業は、ニホンアカガエルの卵塊数の減少が水田放棄に起因していると考えられることから、産卵場所の回復を目指して、5m×20mの湿田を作っています。腿までぬかる沼のような田んぼで、黒米、紫米、中国米などの稲作りを楽しみながら活動しています。私たちが活動している田んぼの2004年2月18日現在の、ニホンアカガエルの卵塊数は21個です。大草谷津全体の2003年の卵塊数は285個,2004年は312個と増えています。われわれの活動もニホンアカガエルの卵塊数の増加に少しは役立っているようです。



## 2. 私なりの谷津田とのかかわりかた

江戸川大学社会学部環境情報学科 小西 朝希子

谷津田を守り、谷津田の専門家を育て大切さを伝えることが出来るようにと「谷津田レンジャー養成講座」(全12回)が開かれました。千葉県からの委託によるNPO法人ちば環境情報センターが企画運営のこの講座に受講生として参加して感じたこと、思いについてお話しします。講座は、体験や専門家のお話などの座学、宿泊研修などがありました。私と谷津田のかかわりは、8年前の高校1年生のとき、千葉市緑区にある下大和田の谷津田に来て身近にこんなにすばらしい自然があると感動し、1回で谷津



田が好きになりました。大学生になりスタッフとしても関わってきました。また谷津田の保全方法が卒論のテーマでもあり、谷津田についてもっと知りたいと思ったことがこの講座を受講した理由です。講座の内容を写真でお伝えします。かかし作り、本埜村の歴史、稲刈り、脱穀(コシヒカリ80kg取れました) 収穫祭、丸山町宿泊研修会、どんと焼きと9回終わっています。

学んだことは、谷津田にかかわる新しい人との出会いがとても新鮮でした。新しい視点で下大和田を見ることが出来ました。同じ環境情報学科に学んでいる学生で、谷津田について知っている人が少なく、どうやったら谷津田の良さを知らせる事が出来るか悩んでいた私にとって、とてもいいきっかけづくりとなりました。また、ちば谷津田フォーラムが主催した、子ども環境講座にも参加して、谷津田で子どもとのかかわりがもて良かったが、子どもが怪我をしたことがあり、まだまだ学ぶことが多い講座でした。

谷津田レンジャー養成講座に参加して、自分が谷津田の専門家になれたかどうかはわからないが、谷津田の良さを自信を持って多くの人に伝えていきたい。また、身近な自然が少なくなっている今、今回の経験を生かして自分なりの新しい視点で、谷津田の保全活動をしていきたいです。

## 3. 千葉市の谷津田等の保全推進に関する取り組みについて

千葉市環境局環境保全推進課 佐久間 紀行

千葉市の南東方向に、長生郡長柄町という町があります。今、千葉市少年自然の家が建設されている所で、谷津田があり、谷津の最上流部には農業用の溜池があり、南斜面に住宅が点在しているような所です。私は、この町の鴉谷(とうや)という地区に住んでおり、今回のシンポジウムのテーマと関連があるように

感じております。

今日は、千葉市の谷津田等の保全推進に関する取り組みについてお話をいたします。まず、千葉市における自然保護に係る取り組みですが、平成4年度から7年度までの4年間をかけて、野生動植物の生息状況等の調査をし、平成8年3月に「千葉市野生動植物の生息状況及び生態系調査報告書」を作成しました。11年度から14年度までは、谷津田いきものの里整備構想などを検討し、15年度には「千葉市谷津田の自然の保全施策指針」を策定・公表するとともに、具体的に保全を推進するため「千葉市谷津田の自然の保全に関する要綱」を制定しました。

指針の位置付けは、「千葉市環境基本計画」の実現に向け、「谷津田の自然」の保全を全市的に推進することとしています。千葉市の谷津田はかつて130か所余りありましたが、都市化の進展などにより63か所に半減しています。基本目標は、「地域・市民と共に守り育て、次代を担う子供たちに引き継ぐ、新たな『谷津田の自然』の保全と創造」です。

指針の特徴は、谷津田を谷津改変型（タイプ ）、谷津健在・圃場未整備型（タイプ ）、谷津健在・圃場整備型（タイプ ）の3つのタイプに区分し、その現状・課題に対応した保全目標を定めました。谷津田の保全対象の候補地を、市内の谷津田63か所の中から、自然的条件・社会的条件などを考慮して25か所を選定しました。その取り組み方針としては、保全の緊急性の高い「圃場未整備の伝統的な谷津田」の保全を中心に事業を展開していくこととしました。

このため、谷津田等の多様な生態系や自然的景観を保全し、市民のうるおいと安らぎのある生活に資することを目的とした要綱を定めました。要綱に基づき、土地所有者が保全の趣旨に賛同した場合は、市と保全協定を締結します。また、活動団体から保全区域で活動を行う旨の申出があり、土地所有者が同意した場合は、土地所有者・活動団体・市が活動協定を締結することができます。

さらに、市は保全協定を締結した土地所有者に1㎡当り年額10円程度の奨励金を支払うとともに、人材育成・資機材などの活動支援を予定しています。また、協定締結期間は原則として5年間としています。

今後は、保全対象候補地25か所の保全に向けて、地元及び地権者に対する説明会などの交渉を進め、保全区域の指定をしていきたいと思っております。

#### 4. 蘇れ！ふる里の谷津田：30年放棄された谷津田の再生を目指して

千葉県立茂原農業高校 渡辺 英二，茂原農業高校農業土木科生徒

私たちは、長生郡一宮町御堂谷松子地区の30年間放棄された谷津田を、光がたくさん当たり、生き物であふれる谷津田に蘇らせたいとの思いから、地主の亀崎さんの協力をいただきながら活動してきました。

・農道の修復 250m 実施。篠竹を伐採し、町から頂いた54tの砂利を敷き、農道を広げ45度の傾斜を25度に修復。その結果、亀崎さんの軽トラックが走行でき、谷津田に耕運機が入るようになりました。

・農業水路開墾。篠竹を伐採することで光が入るようになった。水路に3箇所の小落差工をつけるために堰を作った。全長53mの水路を作った。その結果、流量は1日あたり41tの水が流れるようになり、オニヤンマやセキレイが見られるようになりました。

・放棄水田の開墾。田んぼに生えているシノダケの根の除去作業に苦戦した。赤米とコシヒカリを手植えし、無農薬で育て、稲刈りも手作業で、稲は、オダ掛けし、天日乾燥した。地域の方と収穫祭をしま



した。その結果、懐かしい谷津田風景がよみがえり、トウキョウサンショウウオが見られるようになりました。

・ため池作り。30 m<sup>2</sup>のため池を作った。雨が強く降り土砂が崩れ大変な作業だったが、皆一丸となって作業し、浅瀬にはミクリを植え木道を作ったりして工夫した。その結果、渇水期の水を確保できた。サラサヤンマ、カワセミが集まるようになりました。

・普及活動を小学校へ。長柄町立水上小学校の児童たちと交流授業の場を通して、次代を担う子供たちに環境のことなどを考えることもできました。

・研究のまとめ。30年ぶりに谷津田で稲作を行うことが出来た。多様な水生生物が集まるようになって、驚くべきことに絶滅危惧種に指定されている、イチョウウキゴケが生息していた。これは修復作業により、孢子が光を受けて永い眠りから覚めたのではないかと思う。

・今後の課題。生物多様性型の水田の開墾、イチョウウキゴケの生育域の拡大と、10年20年30年とゆっくりと時間をかけ、かつてのトキが舞い降りるような環境作りに保全活動を広げていきたいとおもいます。

## 5. 松尾町における豊岡田んぼの学校に対する取り組みについて

松尾町役場産業課農村整備係 所田 吉泰

私は松尾町で土木技師として道路、水路の設計監督業務にたずさわってきました。また、これに伴い環境破壊を率先して行ってきたと思います。

松尾町の位置関係ですが、九十九里浜の中央で内陸に位置し、上空には成田空港からの飛行機が通過していて航空騒音のうるさい町です。

今回のフィールドとなる地区は二級河川木戸川を挟んでの地域となります。この地区の約3割が谷津田地域で部分的に耕作放棄地となっています。この谷津田で、自然とのふれあい、自然からの恵み、ものづくり実体験、環境学習も含めた遊びの体験活動の場とし、また、松尾町ではISO14001を取得したことも合わせて、(社)農村環境整備センターの「田んぼの学校」に登録し、平成14年豊岡田んぼの学校を開校しました。



活動組織としては、専門委員、後援組織として松尾町教育委員会、支援組織として東金土地改良事務所、松尾町豊岡小学校、事務局として松尾町産業課農村整備係を軸にして、子ども会、小学校、PTA、などを中心に活動しています。

活動の方針として、生活面からは、田んぼの土からの恵み、人間の基本である生きる力、農業の暮らしと楽しさ。環境面からは、田んぼの動植物、谷津田の自然環境、環境保護の必要性とを合わせ、圃場整備事業を通じて基本方針を設定しました。

- ・田んぼを通じ生物の保全及び自然とふれあいながら子供たちの感性と見識を豊かにする。
- ・伝統的な農法を復活させ、高齢者の活動の場を作り、子供との対話を育てる。
- ・田んぼの学校を通し、都市と農村との交流を深め、地域の活性化を図る。

以上のことから、参加者に環境に対する感性、見識を学んでもらいたいと考えています。

具体的な活動内容は以下のとおりです。平成15年3月30日：田んぼの学校開校(観察会)、64名が参加。同年9月25日：メダカ引越し作戦、61名参加。平成16年2月5日：豊岡田んぼの学校(工場見学会)、160名参加。それぞれ活動の後には学習会、発表会を行いました。

今後の活動は、

田んぼの状況観察、環境評価をして、豊岡地区の環境報告として発表。環境をテーマにした環境学習。

工事終了後の田んぼを利用して稲作、稲刈り体験、メダカ水路の設置。などを予定しています。

まとめとして、地元農家と圃場整備事業の関係ですが、生産性の向上、高齢化、後継者不足等の問題点があり、圃場整備事業を実施することにより解決が図られると思います。

しかし、この工事は少なからず環境破壊につながります。そこで、ISO14001及び豊岡たんぼの学校をとおり、地元農家、圃場整備事業と一緒に考えて松尾町の環境に対する方針である、環境にやさしいまちづくりに向けて努力していきたいと思います。

## 6. 開発で消えた船橋市坪井谷津：坪井地区特定土地画整理事業

グループ・谷津田の番人 高山 清隆



ここ船橋市坪井谷津については、見るも無残に自然破壊された現状と、その原因や経過を報告したいと思います。

20年前、坪井川源流にほど近い台地でテレビやラジオ等の電子部品を作っていた工場がカドミウム廃液を未処理のまま流していたことが原因で、その谷津田で米が作れなくなりました。昔は坪井川に沿って2kmの長い水田があり、60戸ほどの農家が谷津田で米を作っていましたが、「カドミウム汚染」の噂が広まり商品価値を失い、農家にとっては死活問題が生まれました。その頃は、高度成長の絶頂期で汚染された土地を業者が買いあさり、1家あたり5反くらいの農地を企業が買占めました。その後、バブルが崩壊し企業が

坪井の谷津の6割が買い占められていましたが、目減りが起こることから開発の問題が生じ現在に至ったのです。

たんぼはどんどん減っていった最後は全ての農家が手放してしまいました。最後まで残っていた水田には、船橋市内でも貴重な生物がいたところだったのです。なかでもニホンアカガエルの卵塚は937個もあり、ホタルもいました。ちば・谷津田フォーラムの方々との観察会も行ったところ。今では、坪井小学校の観察林も少年野球のグラウンドも開発の中に消えてしまいました。坪井の開発は住宅公団がおこなっていますが、平成21年完成の予定です。

どんどん自然を破壊してできたまちに、開発した人達を中心となって、こんどNPO法人「船橋美し学園」を設立し、美しいまちづくりを目指すそうです。最近NPO法人がたくさんできていますが、真にNPO精神にのっとった活動を望みたいと思います。

## 7. 丸山町の里山・里海発見：第8回シンポジウム「ちば・谷津田フォーラム in 丸山町」報告

ぼんた里山の会 遠藤 イサム

11月23日～24日まで、「ちば・谷津田フォーラム in 丸山町」のシンポジウムを開催しました。その報告をいたします。映像などの準備をいたしませんので、丸山町はどんなところかイメージしながらお聞き下さい。

丸山町は海、里、山があり、散策した場所は5～6kmの範囲に設定しました。山、里、海の3グループに分かれて良いところなど探しながら歩きました。山(雑木林)の良い点は、景色がよい、野草がある、鳥がいる等人の手が加わっていないもの。悪い点は、ものが放置してある、植生の違う木を植えてあるなど、人の手が加わったもの。里(谷津田、河川)の悪い点は、用水路は3面コンクリートで、ビニールや車の放置など。海(河口、海辺)の悪い点は、河口にゴミがある、護岸の問題などいわゆる人の手が加わった物が、現在機能していないものであった。

シンポジウムによって気づいた事・感じた事は、地域住民の自然環境への思いと、都市住民(訪れた人)との思いの差(ギャップ)がある。両者を文化的な面から連携していけばよいと思う。また、機能的な事 美観・景観的な事 生態的な事 地域的な事 歴史・生活文化的な事の5つのキーワ



ードによって整理してみると、全てがそろったらベストと思う。

今後の活用については、資源の活用（機能的。景観的。生態的。地域性。歴史生活文化。すべて資源）と経済、谷津田、雑木林、海辺それぞれに具体的な提案が必要である。なお、4月3日～4日、丸山町でエコツアーを予定している。ご参加願います。そのなかで資源の活用を話し合っただけならばと思います。

## 8. 我孫子市岡発戸・都部の谷津について

岡発戸・都部の谷津を愛する会 田中 房江

我孫子市は利根川、手賀沼に面し、北総台地の中心にあります。私たちの会は、谷津田（岡発戸・都部）に幼稚園を建てる計画がありこれに反対するということで結成されました。岡発戸・都部は40haの広さがあり、田んぼは20haで、半分は休耕田になっています。山林は7haあり、市はここを谷津ミュージアムの予定地とし、ここに幼稚園建設計画がありました。私たちは、この谷津ミュージアムの中に幼稚園は、ふさわしくないと1999年から幼稚園建設をやめてほしいとの提案をしてきました。その結果、市は4年後に代替地を提供し、この問題は解決しました。



このこともあり、今では、我孫子市のミュージアム計画の市民側のメンバーとして私たちの会も参加しています。我孫子市は前向きであるが、行政主導型であるため、市にも協力しつつ、これからも問題提起はおこなって行きたいと思います。私は官(行政)は、お金を取る、実行する、話をまとめ、住民のニーズを聞いていく役割で、住民は、行政が出来ないところを住民パワーで何とかし、互いに持ちつ持たれつでやっていきたいと思います。このミュージアムは私有地が多く大変な努力が必要だが、市のほうもだいが努力し、今年度は予算もつけました。これからも協力しつつ問題提起して行きたいと思います。

## ・シンポジウム「朱鷺（トキ）が舞う千葉の谷津田に！」

### なぜ千葉でトキか

ちば・谷津田フォーラム 代表 中村 俊彦

2003年10月10日日本産最後のトキのキングが、佐渡のトキ保護センターで死亡しました。35年間もカゴの中で過ごしたキングが、最後に自然に返りたいとでも思ったのか、力を振り絞って突然飛び上がりドアに体をぶつけての死だったと伝えられています。

私がトキに関心をもったのは、もう10年以上前だったか中国のトキについてのテレビ番組を見てからです。絶滅したと思われた中国のトキが陝西省の山里で発見され、その調査や保護活動を報じる番組でした。その中の画面に映し出されたトキ生息地が、千葉の里やまの風景とそっくりだったのです。もしかしたら、千葉にもかつてトキがいたのではないかと。そんな疑問から、その後、トキについていろいろ調べるようになりました。



トキに関する文献をあたるにつれて、意外な事がいろいろわかってきたのです。最も驚いたことは、千葉県の上井町では、1948年(昭



和 23 年)と 1953 年(昭和 28)にトキの飛来が記録されており、太平洋側のトキの最後の記録地となっているのです。

#### 1. トキを描く日本画家、時田さんとの出会い

トキを描く千葉県在住の日本画家が個展を開く、という話を耳にしたのは、1995 年(平成 7 年)11 月でした。トキに関する情報が得られるのではないかと思いつつ、私は辛うじてその最終日に会場に行くことができました。その日本画家、時田直善さんが描くトキの絵は、どれも壁一杯の大きなもので、美しく生き生きとしたそのトキの姿は、本当にトキが舞っているかのようなすばらしさでした。展示されていたあるトキの絵の解説に、時田さんが、かつて実際にトキの飛来を目撃したことが記述されていました。この解説を見た私は、できれば時田さんにお会いしたいと思い、すぐに会場にいた係りの方をお願いしました。すでに後かたづけが始まっていましたが、まだ会場におられた時田さんは、快く私と会って下さったのです。

時田さんは、1907 年に千葉県五井町で生まれ、長らく五井に住んでおられたとのことでした。お会いしたとき、時田さんは 88 才の御高齢でした、かつて見たトキの様子を熱心に話して下さいました。1948 年に五井町金杉のハス田に、シラサギ類と混じって 5 羽のトキが飛来したのを目撃したとのことでした。ハス田でメダカやドジョウをついばみ、時々空中を舞うトキの姿は実に美しく、その時の記憶を基にトキの絵を描いてこられたとのことでした。時田さんのトキの絵は、1989 年作の「トキよ蘇れ/鶉その 10」など 15 点の鶉の連作を含め約 20 点に及びます。

#### 2. トキ(鶉)にちなんだ地名や名字の多い千葉

時田さんのトキは時間のトキの字ですが、ご親戚には鳥の鶉の字の鶉田さんもいらっしゃるとのことでした。時田の名字の別の方からは、本家は鳥の鶉田だが、分家に分かれるときに時間の時田になったという話を伺ったこともあります。千葉県には時田・鶉田の名字の方は大変多く、私がもっている県庁職員の名簿だけでも、鶉田は 11 名、時田は 16 名もみられました。

また、千葉にはトキにちなんだ地名や名字も多くみられるのです。鶉鐘、鶉崎、そして今日、鶉谷(とうや)という地名もあることもわかりました。まさに鶉の舞う谷、かつての千葉の谷津田にはたくさんの鶉が舞っていたに違いありません。

私は、谷津田・里やまの保全・再生の夢のシンボルとしてトキの舞う姿を提唱してきました。生物豊かな谷津田と里山林のセットはトキの生息環境としてこの上ないものだと思います。そして、その思いが妥当かどうかは、本日お迎えしたトキの研究者の蘇雲山さんのお話を伺えばはっきりしてくるのではないかと思います。

## 講演 : 中国のトキ保護と生態農業

日中朱鷺保護研究会・環境文化創造研究所 蘇 雲山

はじめに

皆さんこんにちは、私は、日中朱鷺保護研究会代表・環境文化創造研究所主席研究員の蘇雲山と申します。ちば・谷津田フォーラムのシンポジウム「朱鷺(トキ)が舞う千葉の谷津田に！」の講演者としてお招き頂きまして、誠にうれしく思います。トキを千葉に復活させようとする夢のあるシンポジウム、私も楽しみにしておりました。私の中国でのトキの研究が、皆さんに理解されまたお役に立てば幸いです。よろしく願い致します。



## 1. 過去の生息地

トキの野生の生息は現在では中国の陝西省洋県ですが、かつてトキはアジア大陸の東岸や日本などに広く生息していました。

ロシアでは 20 世紀初頭にはアムール川やウスリー河流域、シンカイ湖沿岸、日本海に面したウラジオストックなどの地区でよく見られていました。その後、大量の人口増加による耕地化のためにトキの生息に適した湿地と森林が喪失し、1949 年 8 月にはハバロフスク、1962 年シンカイ湖、1963 年ハサ湖で確認されたのを最後に姿を消しました。

朝鮮半島では西岸の金堤で 1911 年 12 月に数千羽の大群が見られました。1929 年 5 月にはやや北のところでも 100 羽以上の群が見られていた記録が残っています。このころの朝鮮半島では、どこでも標本として採集できるためにそれほど注目されていませんでした。一般的には秋 10 月に飛来し、春期に渡り去っていた冬鳥で、おそらくロシアから飛来していたものと思われます。1936 年、山階博士がソウル動物園を見学したときには、10 羽のトキが他の鳥と一緒に飼育されており、特別の関心は払われていなかったようです。1974 年 12 月、アメリカ人アーチボルト博士（国際ツル財団）は軍事境界線付近で 4 羽を見つけ、韓国政府の許可を得て捕獲しようとしたましたが失敗し、トキの姿は 1980 年には朝鮮半島で見えなくなりました。

トキの学名はニッポニアニッポン (*Nipponia nippon*) といいますが、その名の通りかつては日本中にいた鳥で、日本を代表する鳥でした。カエル、サワガニ、ドジョウ、水生昆虫など水田にいる小動物を食べ、稲作文化を中心とする日本人の生活に深くかわり、古くは「日本書紀」にもその名が登場しています。

しかし、19 世紀後半（明治時代）になって、美しい羽毛がねらわれて撃たれ、水田を荒らすと嫌われ、その数が減っていきました。さらに 20 世紀（昭和時代）に入ると、トキの生息する環境が段々と失われてしまいました。1981 年 2 月、佐渡にいた最後の 5 羽が人工増殖のために捕獲されました。ついにトキは日本の空から消えたのです。日本産最後のトキ「キン」も昨年 10 月に死亡したことは皆さんもご存じと思います。

中国ではトキに関する最も古い記録は 2000 年前の「史記」です。

1963 年に甘肅省康県で発見しましたが、その後、姿が消えてしまいました。絶滅したと宣言しようとした矢先、日本の野生トキが捕獲された 1981 年 5 月に、陝西省の秦嶺山脈南麓にある洋県の標高 1,200 m の山中で 7 羽のトキが発見されました（親鳥 2 ツガイ、幼鳥 3 羽）。

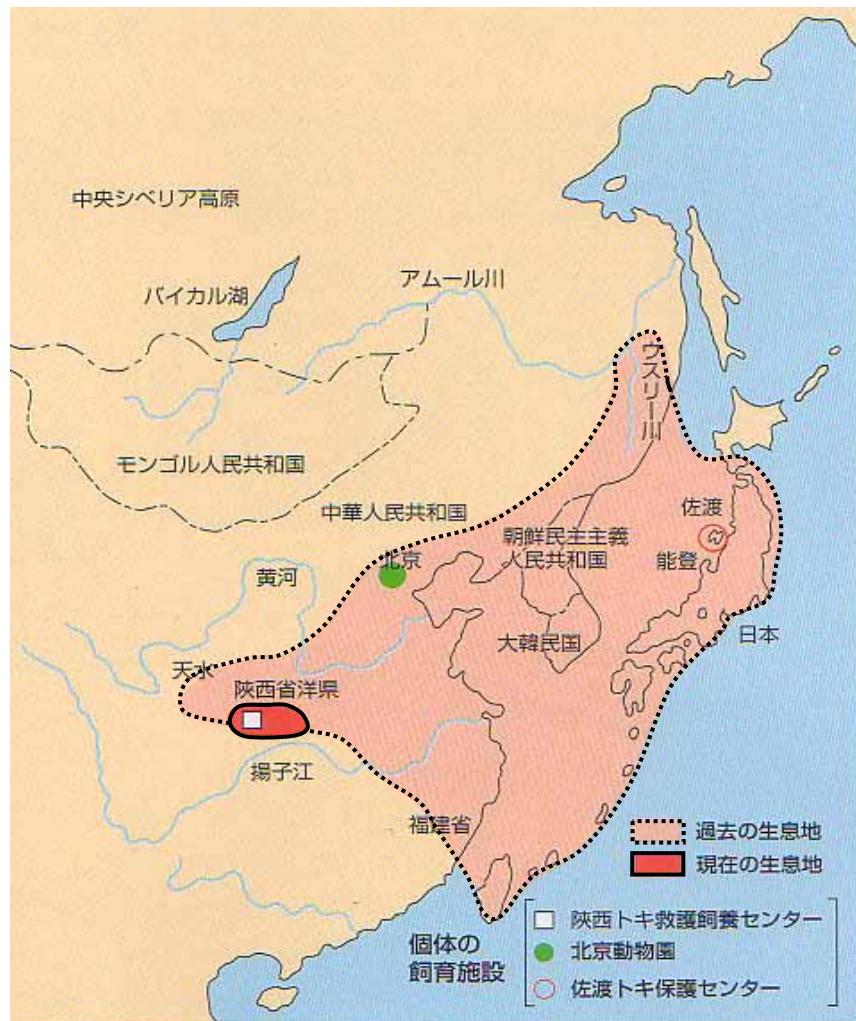


図 1: トキの分布図

## 2. 中国におけるトキ保護の歩み (1981年～2003年)

中国ではトキの保護措置として次のことを実施しました。(1)トキを保護するための組織強化、(2)エサ場の確保です。トキのエサはドジョウやタニシなど水田にいる生物です。エサを確保するには、冬期湛水(たんすい)田(冬に水をためておく田んぼ)を確保するとともに、農薬・化学肥料の使用を規制するようにしたため、農家への補償などを行いました。また、(3)繁殖地への立ち入り規制、(4)ドジョウを撒いて人工エサ場を設置しました。村へは車が入れないのでトラクターで少しずつ分けて運ぶので大変です。(5)ヒナ保護として、天敵被害予防や収容を行っています。(6)啓蒙活動、地域住民の協力として、トキを見かけた日付や個体数なども記録してもらっています。いずれも地域の協力は重要なカギとなりました。



写真1：秦嶺山脈奥にある野生トキの営巣地



写真2：田起こしした水田

## 3. トキ生息地と山村経済

トキ生息地の秦嶺山脈洋県の山村です。この山村へは車では行けません。バス終着地からさらに3、4時間歩くか、バイクなどに頼る他ありません。調査でこの村へ行くときは自分たちの食材なども徒歩で運びます。この村は、棚田状の水田耕作と焼畑での農業のほか、樹木を伐採し炭焼きも行われており、農作業はほとんどが人力です。したがって、自然資源へ依存する経済状態となっています。ただ、この焼畑や大木の伐採は、トキの生息へ悪影響を及ぼすことが懸念されます。また、年によっては水不足になります。水不足により水田が干上がり、冬の田に水がなくなりすると、トキのエサ場がなくなってしまいます。



写真3：民家と田んぼ



写真4：山間地の水田



#### 4. 人工繁殖と自然繁殖の2つの方法

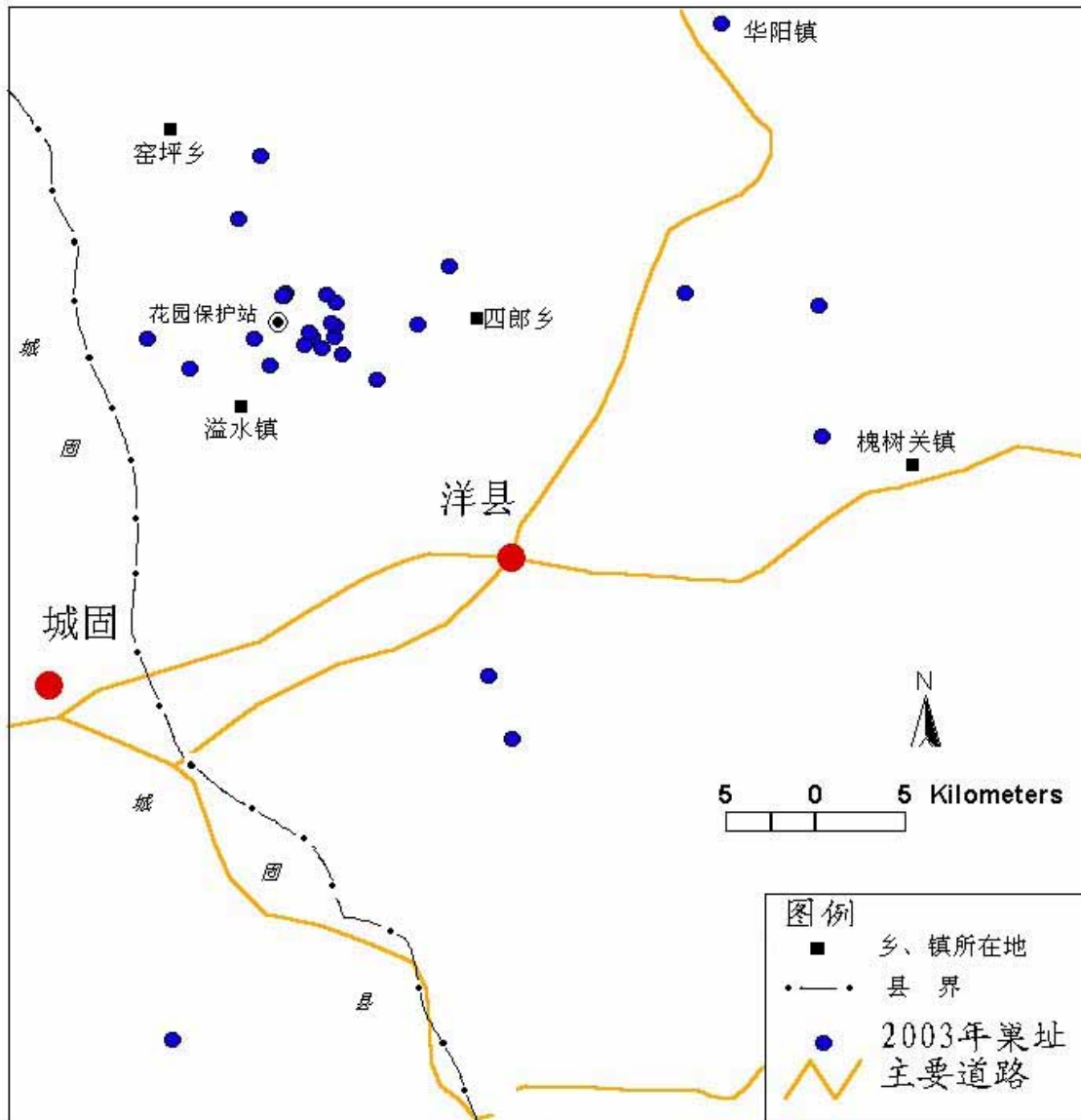


図2. 洋県での自然繁殖地

トキは、自然繁殖と人工繁殖が行われています。人工繁殖が行われているのは、北京動物園と洋県繁殖救護センター、周至保護センターの3箇所です。個体数は順調に増えています。一方、自然繁殖の方では、近年、異常気候による干ばつの影響で水田の面積が減少され、トキの餌が不足状態となっています。洋県トキ保護センターの統計によれば、1999年には一つがいから生まれる卵の数は4個13%、3個33%、2個47%でしたが、2003年には3個が14%、2個53%、1個14%と年々低下しています。今後は生息環境の変化も心配されます。

また自然繁殖状況は、2003年には41箇所て営巣、68羽巣立っています。分布状況は図のようになって一部に多く集中していますが、鳥インフルエンザなど疫病を配慮すると、もう少し分散した繁殖地の確保が望まれます。

#### 5. トキと人間の共生関係

こうした状況から、中国では自然保護区を設定しました。自然保護区は、面積37.549ha、人口は13郷・鎮99村24,696世帯77,612人の地域です。トキは人間の生活と密接に関わっていました。民家の20~30m先にトキの営巣木があり、民家にトキが遊びにきます。水田で働く人々のすぐ後ろをトキが悠々と歩き、トキと人間は信頼関係で結ばれているのです。私たちのような外から来た人が近づくとすぐ逃げてしまいます。トキは水田や水路にいるドジョウなどを食べますが、エサを取るの器用とはい

えません。トキはエサをとる際にせっかく植えた苗をかき回してしばしばイネをたおしてしまうので、農家の人からは嫌われていたようです。



写真5：子供とトキ



写真6：水田でエサを取るトキの群れ

## 6．生態農業の展開

しかし、最近では、冬に麦を裏作する農家もふえ、冬場のエサ確保が難しくなっています。今後は、経済発展の影響で環境悪化も懸念されます。トキと人間の共生関係を築いていくためには、共生できる自然循環型農業と地域経済の自立が課題です。こうしたことから、トキ生息地保護のため、農業の新しいシステムとしての生態農業が必要となっています。洋県の繁殖救護センターの近くには、将来トキが野生化した時のために約13haの水田地区を設け、その中には湿地区約1.7haなどを設定しています。

## 7．朱鷺の日中協力

トキの復活にむけて日中協力が広がっています。朱鷺が再び大空を羽ばたくためには、第一に野生化に向けての研究活動として、トキの生息環境及びエサ生物の生態を明らかにする研究、また野外におけるトキの個体群維持のための自然環境の特定が必要です。第二に、人間と自然の共生のための地域づくりとして、トキと人間と共生できる農業システムや、トキと人間が共生する地域社会を形成していく必要があります。第3に野生復帰個体数の確保や遺伝的多様性の維持が必要です。

## おわりに

私は、現在、千葉市に住んでいます。中国の洋県と千葉県其自然環境は大変よく似ていると思います。トキの生息環境としては、気候や水条件についてはむしろ千葉の方が良い状況と思います。千葉での野生のトキの復活のプロジェクトが立ち上がれば、是非私も協力させていただきたいと思います。本日は、ご清聴有り難う御座いました。

## <コメンテーターより>

日本雁を保護する会 荒尾 稔

ただいま、蘇雲山さんから、中国でのトキに関して貴重なご報告を頂きました。特にトキの保護と、生態農業という観点からの話であり、千葉県においても大変貴重な情報だと感じています。蘇雲山さんのお話し頂いた内容は、トキが舞う千葉の谷津田にという、今回のシンポジウムを考えたときに、大事なポイントがいくつもあったと思います。今回のお話では、特に トキの生態を十分に配慮した農法の必要性、 トキの野生状態でのトキの独自の生態的特徴、 中国でのトキの再発見から、保護、再生への対策、 これからの見通しについてと日本への提言にも触れて頂きました。以上を踏まえて、日本でのトキの、特に千葉県での、これからのロマン（夢）としてのトキの可能性について、若

干のコメントをさせていただきます。

その前に、コメンテーターとして自己紹介させていただきます。私は、現在、渡り鳥の雁・鴨・白鳥のうちでも、特に日本へ渡来する「雁を保護する会」の、主に千葉県下での活動を行っている任意団体の東京地区責任者です。その目的は、「関東地方での渡り性の水鳥の復活」にあります。



江戸時代、千葉の利根川筋や東京湾沿いの地域は日本最大級の水鳥の越冬地でした。手賀沼、印旛沼周辺だけで、年間 150 万羽の「雁・鴨・白鳥、そしてトキやコウノトリ、丹頂鶴等」水辺の渡り鳥が、渡来していました。しかし、現状は全域で 10 万羽を切っていると言われていています。ところが、今アメリカ大陸や、ヨーロッパ・アフリカ大陸を渡りで結んでいる水辺の鳥の個体数を 100 として、日本を含むアジア大陸での水鳥の渡来数が極端に少ないとされています。

関東平野全域、特に利根川の氾濫源であったエリアが、江戸時代、日本がアジア大陸で有数の水鳥達の渡来地であったことは文献等で、鳥の学者や研究者らには良く知られています。まさに、日本における、特に関東地方での大規模な越冬地を喪失したことが、日本だけでなくアジア大陸の渡り鳥たちにとって、欧米の個体群と対比して、決定的に少ない原因を招いたことと深い関連があると考えられています。すなわちこの越冬地、実は千葉県の利根川、江戸川流域、そして里山と谷津田だと考えられています。千葉県で、江戸時代、明治時代、昭和 10 年頃までに、かつて渡来生息していた水辺の鳥たちのリストを至急作ってみる必要があります。千葉県下で渡来しなくなったり、絶滅したり、絶えてしまった水辺の鳥を含めた生き物、激減した水辺の生き物だけを取り上げても、多大変な数になっているのではないのでしょうか。

関東地方、特に利根川沿いの氾濫源、特に印旛沼周辺域での、越冬地の復活は、アジア全域のあらゆる水辺の鳥たちの復活・再生を促すキーワードとなります。

- ・トキ：繁殖地と推定され、北海道や大陸からの越冬群も大いに考えられます。
- ・丹頂鶴：北海道や大陸からの越冬群
- ・コウノトリ：繁殖、そして北海道や大陸からの越冬群
- ・白鳥：シベリヤや大陸からの越冬群
- ・雁：シベリヤや大陸からの越冬群

その他、多種多様な野鳥が越冬のために冬鳥として渡来していました。近年の中国やロシア内陸部での大規模な開発行為、近代的な農法の普及や重工業化が進みつつあり、その結果として、生態系への影響が心配されだしています。ますます重要な地点であります。

千葉県におきましては

田んぼや平野部分では、雁・鴨・白鳥の渡来復活

一般に言われる里山と谷津田では、トキの復活

河川では、ウナギの復活や、鮭の遡上と産卵等の復活

この 3 つを柱として、それぞれ地域の最も重要な生き物での指標として雁や白鳥、トキ等の野生個体が生活でき、かつ少しずつでも数を増やして復活できる環境再生を目指すための運動を、この会場の皆様方とご一緒になって提唱していきたいと考えています。

そのためには水辺の改善、特に米作り農業の方法での慣例農法の乾田から、ふゆみずたんぼ(冬期湛水水田)への切り替えをする等、農法の改善普及が何よりも効果的であると分かってきています。私は、その啓蒙と普及に努めています。生物指標としてのトキの復活は、里山林と谷津田部分を一緒にして、人々が平和で、安心して生活出来る場所としての証であります。同じく雁・鴨・白鳥の復活は、平野部でのおだやかな生活の場が出来ていく。トキの住める里山づくりとは、地域再生のシンボルとして、ロマンとして、かつ 10 年、30 年をかけた、課題であると考えてみたらどうかと思います。

トキに関する本論に入ります。

#### 1. 日本のトキは 39 羽

中国では、昨年 7 月の段階で 562 羽、そのうち野生状態は 270 羽、332 羽は禽舎で飼われています。先日「キン」が死亡して、日本の DNA を持った個体は絶滅してしまいました。ただ、学術的に言って、日本と中国のトキとは DNA レベルでもほとんど差が無く、同一種と判定されています。現在、佐渡では、総数 39 羽、うち 22 羽の成鳥、亜成鳥がおります。特に 2003 年生まれが 18 羽もおります。これはトキの 3 番いから 7、5、8 羽の雛が育ちました。単純計算では、1 番が平均 6 羽となります（注意：全て卵からの完全飼育）。

本年度の繁殖に関しては検討中とのことですが、5~6 番が可能と言われ、順調にいけば 30 羽~35 羽の雛が生まれ、育ちそうです。ただ、残念ながら、本年度は鳥ウイルス発生の関係から、トキの日中交換が出来ません。従って、本年中には 70 羽以上に、来年末には確実に 100 羽をこし、4~5 年以内に 200 羽に達しそうです。

#### 2. トキの繁殖力

トキは、格別に頑丈でかつ丈夫です。最後の 1 羽となったキンさんの例で分かるように長生きでもあります。また、多産系です。2 年目には親になり、通常 3~4 羽の幼鳥を育てます。野生状態では天敵が多く、親にまでなれる個体は少ないが為に、これだけ多産なのでしょう。しかし、飼育されて安定すると、孵卵器からの飼育ですと、ネズミ算的な増え方が予想されてしまいます。2003 年生まれが、来年には繁殖の出来る大人になります。中国とのトキ個体の交換が順調であれば、2005 年度は 12~14 番が繁殖し、10 年以内には、佐渡でのトキの放鳥が始まることになると思います。

#### 3. トキの野生復帰

それは、絶滅の恐れが遠のくと同時に、今後激増が予想されるトキの分散收容先と将来の放鳥化へ向かっての野生復帰をどうするかという新たな課題です。実際、環境省では、今後トキの收容先の分散化を検討中です。佐渡のトキセンターでの收容力の限界（最大 100 羽まで）があり、病気（今回の鳥ウイルスや鳥コレラ等）での集団感染の危険を避けるための対策も必要です。

#### 4. 野生化に千葉県として名乗りを上げる

千葉県とトキというと、なんでと言われる方々もおられると思います。以下 3 つの視点だけ、お話をさせていただきます。千葉県は、太平洋岸では、最後にトキを観察できた場所です。昭和 28 年にも、千葉県五井で、観察されています。冬の期間、渡りもしますので大陸から越冬地として飛来した可能性も考えられます。現在の中国のトキの繁殖地は、緯度で言うと、ほぼ千葉と同じ緯度です。繁殖地は、千葉の里山と谷津田の感じとそっくりです。地形的にも気候的にも、植生を見ても実によく似ています。江戸時代初期、千葉県がトキの本拠地で有ったのではないとも言われています。千葉県下には、トキの名称の土地や山がいくつもあります。また、朱鷺にちなむ名前の方々多いと言われています。それだけ、江戸時代にはトキは里山の鳥として普通の鳥であったのではないのでしょうか。

#### 5. トキは千葉県の里山の再生を、ロマンを持って語るためのシンボル

生態系配慮の田んぼとは、いままでの慣例農法とは異なり、冬・水・田んぼ（冬期湛水水田）と呼ばれる、冬の期間に水田に水を張る農法のことを指します。朱鷺の生態系を支えられるのは、昔の農法に基づいた生産方法です。冬期湛水水田を行いますと、千葉県印旛郡栄町の新海さんの田んぼの事例があります。慣例農法で、周辺は乾田化しています。そこへ冬・水・田んぼ（冬期湛水水田）を行ったところ、白鳥や雁や、鮭が遡上してきました。鴨や水田性の生き物が殺到してきました。でも、冬・水・田んぼが一番楽しいには自分だと。また、昔の田んぼの原風景だと気がつかれたそうです。

トキの生息地復活には、生き物を大量に支えられる環境をつくる必要があります。トキは、1 年間 365 日、よほど大雪等で条件が悪くなければ田んぼを離れません。同時に、食に関して、大食漢だと言われ

ています。それを支えていくだけの、生き物が獲られる場所として、地域での生態系の環境が必要となります。同時に、無肥料・無農薬を目指した農業も要望されます。

## 6. 新潟県佐渡での展開では、冬期湛水水田による農法の見直しが中心

トキの復活を目指す佐渡では、冬期湛水水田を基本として、農法は村落単位で地産地消的に農法が違います。農法の展示会にもなっています。地域の活性化のためにも独自の付加価値を付けた米作りやお米の新たなブランド化も試みられています。佐渡と同じように、千葉でもトキを介した新たなロマン作りが大切です。冬期湛水水田を広げて、環境に配慮し、生き物に囲まれた、農業を始めてみませんか。以上が私の提案です。

## 講演 : 朱鷺とサケの里やま再生を目指して

- 里山と谷津田を再生する為への提言 -

桜宮自然公園をつくる会副会長 所 英亮



千葉県香取郡多古町は歴史・文化遺産の宝庫です。染井用水堰は、日本で唯一の集落で管理する方式で残されています。多古町染井地区の水田は、1反歩(10a)が基準です。これは全国で2番目に行われた耕地整理(土地改良)のためです。また、染井用水は、250年前から染井地区30ヘクタール及びその主要な染井堰があり、慣行水利権が確立しているのは全国ここだけであるといわれています。それは「水争いの教訓」でもあります。この堰と向かい合った山の斜面には、15,000年前に隆起して貝殻層から、高校生が人骨を発見したが「多古原人」のロマンは2ヶ月で消え、その後現れたのが、2001年11月「桜宮自然公園をつくる会」(佐野豊三会長)の発足でした。

### 1. 地域での里山と谷津田への取り組み

#### 1) 農業委員会と町の関わり

農業委員会と町の関わりとして、2001年当時、わたしは農業委員会会長として「産廃」と「残土」扱いの不法投棄との「谷津田保全」の対策として、「遊休農地の解消という課題」という方式を使用する方法を意図し、農業委員会と町長との意見交換を3回検討協議をしました。その結果、農業委員の担当地域で受け入れ出来た地域で「住民参加型」により、公園作りを実施しようと「住民主導型」で行うということになりました。しかし、「住民主導型」で行う地域は少なく、従って会長の地元で実施することとなりました。

多古町染井字三本入、天井田地区の地権者での説明にはあまり難しいことはありませんでした。この地域は、30年前東京電力の送電線の線下補償交渉で、農道整備や農業用水のパイプライン化で谷津田改善に大きな成果を上げていました。

30年後の三本入、天井田の地権者を廻ってみると、減反で大荒れになった谷津田は個人で復元できないので「田んぼ公園」にするならば「大賛成だ、処分場が出来てからでは意味がない」といい全員が賛成してくれました。早速、町に要請書、「基本計画」などを自分たちで作り、町に提出しました。

#### 2) 地域での取り組み

2001年11月に、思い立ったら吉日と言うことで、地域住民、ボランティアなど40名が参加。三本入りの谷津田に入り、チェンソー、火炎放射器、ユンボなどを使って、演習場のような状況になりました。その先頭には町長が駆けつけ、「住民主導」の自然公園作りがはじまり、6ヶ月の作業で、のべ、250名(平均40名)が参加し、翌年5月には竣工式を迎えました。自然公園としたのは、谷津田80アール、40アールの2ヶ所と、周辺の雑木林4ヘクタールを含め、5ヘクタールとなりました。



### 3) 堂本知事からの呼びかけが大きなきっかけに

この「住民主権」の提起は、2001年に多古町で行われた「菜の花」県民会議で堂本知事は「産廃と残土対策」を、町を経て県に提案して下さいといったものです。「自然環境を守る立場から産廃や建設残土による埋め立て計画の事例をあげ、悪質で巧妙化する業者から地域を守るには住民の同意無しには許可を与えないように」との要望に関して、知事は法の不備を認めながら、「地域住民が考えたことを町に提案し、町から県へ、県から国へという流れになれば日本は大きく変わる、住民一人一人の力が主権者として結集すれば千葉は元気になる」と結びました

この町道路沿いには産廃、町水道の水源地2ヶ所、給食センターなどがあります。町が反対を決議する中で、県では事前協議を終了したのです。「桜宮自然公園をつくる会」は、公園作りを通じて、中間処理場計画を断念させていくことです。この里山を公園に、「住民憩いの場」として後世に引き継ぐのが谷津田の地権者の責務であるとして自然公園作りを継続しています。

## 2. 里山のすばらしさ(夢とロマンを里山に託して)

2002年6月の自然公園の雑木林の一番高い梢に大きな鳥がこちらを見ている。サシバです。里山でなければ住めないという渡り鳥です。よく観察しているのは、人間を(鵜の目鷹の目)観察していたのです。

桜宮自然公園には、生き物がたくさん戻ってきました。天井田の池には、カワセミは飛来する常連です。サギ類もいつも数羽が渡来しています、その餌になるザリガニ等が多い。ということは、将来トキが放鳥されたとしたら。トキも来ることがありそうだと思います。



さらに広場、池、湿地をつくり、天井田地区の谷津田40アールは池にしてあり、トンボ、多様なカエル、タテハチョウやモンキチョウなどがいます。

## 3. 里山と鮭(しゃけ)

栗山川に遡上する鮭は待つはくれません。また、広く地域を見ると、多古町の中央は流れる栗山川は、鮭の回遊する南限の川と言われていますが、その鮭がどうなっているかの消息を訪ねて、横芝の横芝堰に行ってみました。

毎年、10月~12月に750~1200匹が捕獲されているそうです、新しい魚道付きの堰が出来た折りには、上流まで、多古町や栗源町まで遡上していくでしょう、そして産卵する場所を里山の近くに整備しなければなりません。太平洋岸で最も南限の川に2005年には遡上が可能な河口堰が完成します。栗源町には最適な産卵場所と思われる場所も残っています。近辺にある、三隅川や一宮川には、稚魚を何度放流しても遡上が見られないそうです。やはり栗山川のごとく上流域に豊富な「里山や谷津田」が存在しないと、鮭の遡上が見られない模様です。

2003年9月18日より、栗山川の河口で、栗山川漁業組合員によって、例年通り鮭の捕獲が始まりました。捕獲後、採卵して県の養魚所で孵化させます栗山川は、かつてシャケの上る南限の川として知られていますが、最近上流域にある多古町等の流域で、シャケを捕獲したという話は聞いたことがありません。そこで、栗山川漁業協同組合の役員に直接聞いたところ10月18日から本年の捕獲が始まるので前日に網を仕掛けるので両日に渡って見学したらその理由が分かるであろうと言われました。

その期限は、現在の横芝堰は魚道がないために、2年間をかけて可動式の堰が、今年中に堰の工事が終了することになります。来年(2005年秋)には鮭は上流へ遡上します。もう鮭は待つてはくれないのです。

早朝5時にカメラマンの桑田喬さんと一緒に行くことになりました。場所は光町の東陽病院の西側で栗山川橋の下にある河口堰です。河口堰は海水が川にあがらないようにする施設ですが、現在の堰には大きな段差があり、また「魚道」がないために魚があがれないのです。魚の生態系が河川事業によって阻害され、生物多様性が公共工事によって壊されたままになっていたのです。こうした問題は行政と選挙区が絡んで「票」にならない川になっていたのです。そのために解決に時間がかかってしまったということです。現在の河口堰の隣に2005年完成予定で魚道がある堰の工事が着工されていました。従ってシャケが上流に上るまで後2年かかるという事です。

この間、県からシャケの捕獲と調査を委託され、栗山川漁業組合の方の手によって捕獲されたシャケは3k離れた組合長宅で目方を量られ、切り身はパックにされて冷凍庫に保存されます。また鮭のめすは卵を取り出して、受精に合うかどうか確認された物を県の育成施設に納入されます。これが漁業協同組合の仕事です。鮭の放流は行政の関係もあって横芝町と光町は共同して行っていると横芝町観光課の職員は説明してくれました。

「栗山川」が鮭の上る川としてロマンと夢を地域にもたらすには、環境や自然を守る運動がNPOやボランティア団体等の手で行われることが必要であり、行政指導型では行事化してしまい継続していくに限界があると語っていました。鮭が上流域に上れる日が来たとき、栗山川流域の町村ではどんな取り組みがされるのでしょうか？

鮭の産卵場所がコンクリーとの3面張りにされたり、田んぼに水がない現状では、果たして産卵が出来るのでしょうか。これからは、上流域では鮭の身になって考える必要があると思います。鮭の神を祭ってある山倉大六天神社には鮭を奉納する人は何人になるのでしょうか。鮭のロマンはつきません。

#### 4. 谷津田とその利用について

桜宮自然公園では、谷津田を復元し、周囲の雑木林の下刈り、里山を復活して2年になります。里山の保全是息の長い仕事であり、住民の協力が何よりも力になっています。谷津田や池、湿地づくり、草刈りをするだけで、野鳥が増えたり、昆虫などから、珍しいトンボなどが発見されて興味が増すばかりです。

県の里山保全条例ができて、NPO、市民団体や地権者である農家が中心になって、自主的な推進体制が出来ようとしている。これを県が援助と支援して、自主性を育成しようと言うことです。荒れた谷津田や山林がこれによって産廃や残土、ゴミ捨て場などの不法投棄を多少減らすことが出来るのではないのでしょうか。

米の減反で荒れた谷津田や外国木材輸入にたよって手入れがされなくなった、山林が関心をもたれることはいいことです。里山は今、各方面で活用方法が検討されており、ブームになるうとしています。まさに「災いを転じて福となす」として、千載一遇のチャンスにもなると思います。しかし、一步誤るとバブルの時と同じ乱開発にもなりかねません。そこで、その里山の中心になっている谷津田についての、いくつかの提案をします。



## 5. 谷津田の(暫定)管理についての、わたしの提案

谷津田は通常は、調整水田として、年間を通じて水を張って荒廃を抑える。

緊急時には米作りが出来るように戻せます。

調整水田とは、水田に水を張って管理するほか、溜め池、ビオトープも対象とする

谷津田は調整水田として「生き物の宝庫」として、野鳥の餌場計画を立てる。

この計画には、谷津田のシンボルとして、トキを入れる。

谷津田の調整水田計画には、土地所有者、NPO、研究者、行政などが参加して行う事とします

休耕田は全て調整水田溜池として、谷津田を管理していく事

## 6. 今後に残された課題

現在は、財政(援助・助成)を受けています。町から助成金30万円×3年間、2004年度までの予定です。県からの「里山保全整備活用事業」は1回限りです。さらに国からの「厚生労働省(失業対策事業)」を活用してもらおう。今後はグリーンボランティアを受け入れる体制を整えていきたいと思います。

里山活動団体として、山林の枝打ち、間伐出来る人の育成としては、雑木林、谷津田をまじえた変化に富んだ、楽しめる自然公園としての場所をつくり、「桜宮自然公園をつくる会」の組織を拡大して、森林組合と同じくらいの組織にし、里山を実際に管理できる人材を、早く育成できる体制を整備する状況にもっていききたいと思います。

都市と里山の交流の場として確立していきます。NPO等の活動の場として公園を開放し、里山と都市との真の交流の場づくりを目指します。

また地域住民、都市NPOとの交流を通じてグリーンツーリズムを創造していきます。地域を守りながら、その生活の中での生活環境を都会人の方々に利用してもらいます。そのために、ゆったりと生活を楽しめる里山空間を創造します。国際空港に近い(車で15分)特徴も生かして、市民農園制度の考え方やヨーロッパ型市民農園のモデルを融合した生活空間を切り開いていきたいと考えています。

## <コメンテーターより>

NPO法人 ちば環境情報センター 小西 由希子

谷津田を産廃と残土の不法投棄から守るため、また「遊休農地の解消」という課題を解決するために「田んぼ公園」をつくられたというすばらしい話しお伺い致しました。反対運動ではなく、公園をつくるという、何歩もすすんだ前向きな方法で問題を解決されたことは、同様の問題で悩む私たちにとって大いに参考となるお話だったと思います。

さらに、こうした取り組みが、外部からの市民やNPOではなく、住民主導、すなわち農業に携わるの方々の手によって行われているということは、特筆すべきことであると思います。

また、お話しの中で、調整水田、すなわち水を張っただけの田んぼが生産調整の手段として認められているということを知りました。谷津田の放棄田に池、湿地をつくり、草刈りをするだけで、野鳥が増えたり、昆虫や珍しいトンボが発見でき、興味が増すとお話でした。米を作らなくても調整水田とすることで生き物の生息空間も確保されるということですから、もっと他の地域でもこの方法を活用できたらとも思いました。

ひとつひとつのお言葉に、所さんのお人柄と情熱を感じ、いいお話しをうかがえましたことを感謝致しております。



## 2003年度 ちば・谷津田フォーラム活動実績一覧

	活動名	実施年月日	活動場所
1	第39回「下大和田谷津田の観察会とゴミ拾い」	2003年4月6日	千葉市緑区下大和田
2	第39回幹事会	2003年4月16日	千葉県立中央博物館
3	第40回「下大和田谷津田の観察会とゴミ拾い」	2003年5月4日	千葉市緑区下大和田
4	第40回幹事会	2003年5月21日	千葉県立中央博物館
5	第41回「下大和田谷津田の観察会とゴミ拾い」	2003年6月1日	千葉市緑区下大和田
6	第41回幹事会	2003年6月9日	千葉県立中央博物館
7	ちば・谷津田フォーラム会誌第8号発行	2003年6月30日	ちば環境情報センター事務所
8	第42回「下大和田谷津田の観察会とゴミ拾い」	2003年7月6日	千葉市緑区下大和田
9	第42回幹事会	2003年7月16日	千葉県立中央博物館
10	東電蘇我ビオトープ見学会	2003年7月21日	千葉市中央区蘇我
11	第43回「下大和田谷津田の観察会とゴミ拾い」	2003年8月3日	千葉市緑区下大和田
12	第43回幹事会	2003年8月29日	千葉県立中央博物館
13	第44回「下大和田谷津田の観察会とゴミ拾い」	2003年9月7日	千葉市緑区下大和田
14	第44回幹事会	2003年9月26日	千葉県立中央博物館
15	第45回「下大和田谷津田の観察会とゴミ拾い」	2003年10月5日	千葉市緑区下大和田
16	第8回シンポジウム「谷津田フォーラム in 丸山町」下見	2003年10月12～13日	安房郡丸山町
17	ちば・谷津田フォーラム会誌第9号発行	2003年10月25日	ちば環境情報センター事務所
18	第45回幹事会	2003年10月30日	千葉県立中央博物館
19	第46回「下大和田谷津田の観察会とゴミ拾い」 & 古代米の稲刈り	2003年11月2日	千葉市緑区下大和田
20	ちば・谷津田フォーラム 第8回シンポジウム「谷津田フォーラム in 丸山町」(共催)	2003年11月23～24日	安房郡丸山町
21	第47回「下大和田谷津田の観察会とゴミ拾い」 & 古代米の稲刈り	2003年12月7日	千葉市緑区下大和田
22	第46回幹事会	2003年12月9日	千葉県立中央博物館
23	第48回「下大和田谷津田の観察会とゴミ拾い」 & 古代米の稲刈り	2004年1月4日	千葉市緑区下大和田
24	第47回幹事会	2004年1月14日	千葉県立中央博物館
25	ちば・谷津田フォーラム会誌第10号発行	2004年2月1日	ちば環境情報センター事務所
26	第49回「下大和田谷津田の観察会とゴミ拾い」 & 古代米の稲刈り	2004年2月1日	千葉市緑区下大和田
27	下大和田土地区画整理組合準備会との懇談会	2004年2月12日	下大和田土地区画整理組合準備会事務所
28	第1回里山勉強会「里山に託す私たちの未来」徹底討論・里山をいかに守り活かすか！(実行委員)	2004年2月14日	千葉県立中央博物館
29	第48回幹事会	2004年2月18日	千葉県立中央博物館
30	ちば・谷津田フォーラム第9回シンポジウム「朱鷺が舞う千葉の谷津田に！」(共催)	2004年2月21日	千葉県立中央博物館
31	第50回「下大和田谷津田の観察会とゴミ拾い」 & 古代米の稲刈り	2004年3月7日	千葉市緑区下大和田
32	第49回幹事会	2004年3月25日	千葉県立中央博物館

### < ちば・谷津田フォーラム定期観察会 - 下大和田谷津田観察会とゴミ拾い & 里山の手入れ >

場 所：千葉市緑区下大和田

集 合：中野操車場または現地 10:00 (地図参照：HP：<http://yatsuda.2.pro.tok2.com/>)

開催日：毎月第1日曜日 10:00～14:00 (観察会は10:00～12:00)

交 通：中野操車場へはJR千葉駅10番千葉フラワーバスで45分(520円)、車の場合は東金有料道路を中野料金所で降りて東金街道に入り、東金に向かって1.5kmほどで右側にラーメンショップの看板がみえてくる。道路をはさんで反対側がバス停。駐車場あり(会員の林理氏提供)

持ち物：弁当、水筒、敷物、長靴など 参加費：300円(保険代、資料代)

主 催：ちば・谷津田フォーラム 連絡先：ちば環境情報センター TEL&FAX 043-223-7807



サケ遡上中

栄町、水路に6匹



栄町の酒造水門そば水路で見つかったサケ

サケ遡上、次々に

印西市の利根川支流、浦部川にシロサケ約四匹が遡上し、話題になっている。市広報も「この付近はサケが遡れるのは珍しい」とホームページで写真を公開している。



浦部川を遡上したシロサケ

最初に目撃されたのは三日ごろ。近くの住民が釣ったものを広めた。市広報課には、産卵現場を見たという知らせも寄せられている。

放流の稚魚戻る  
佐原の小野川  
佐原市の市立佐原小学校金魚鑑賞会で見せていた。

2003 年末は、北総の河川でサケの遡上が相次いだ。中には産卵する個体もあった。

3年前放流の稚魚が戻る？

佐原・小野川  
3年前放流の稚魚が戻ったという噂が流れている。佐原市立佐原小学校の金魚鑑賞会で見せていた。



佐倉市では市長を交えたシンポジウムで、谷津田の生物多様性や人と自然の共存をテーマに、シンポジウムが行われた。

自然との共存を模索

佐倉でまちづくりの集い

佐倉市教育委員会主催の三百人の市民が参加した。「佐倉市生涯学習まちづくり 渡賀博孝市長のあいさつ」の推進の集いがこのほど、に続いて、「今、佐倉の自くむために重要」と語り、田と里山を保全すること

広げよう保全と管理

千葉市で「里山勉強会」活動発表や講演も

【千葉】県内の市民団十人が集まり、「里山に合せて取り組むことが体などがメンバーの里山勉強会を行った。山シンポジウム実行委した勉強会を行った。山シンポジウム実行委した勉強会を行った。山シンポジウム実行委した勉強会を行った。

千葉県立中央博物館でおこなわれた「第1回里山勉強会」。立ち見も出るほど大盛況で、活発な意見交換が行われた。

# 「トキ舞う環境を」

## フォーラムで 保護活動など紹介 中国の研究者

トキの生息できる自然環境を構築していくこと



中国でのトキ保護活動など紹介する蘇雲山氏

千葉県立中央博物館でおこなわれた第9回ちば・谷津田フォーラムシンポジウム「朱鷺が舞う、千葉の谷津田に!」。中国のトキ研究者蘇雲山氏をお招きし、トキの生息できる環境の重要性などが論議された。

「朱鷺(トキ)が舞う千葉の谷津田に」ちば・谷津田フォーラム主催が開かれた。中国のトキ研究者の蘇雲山氏が講演し、トキの生態や中国での保護活動

中央区

をスライド写真を使って紹介した。野生のトキは一九五三年まで県内でも生息していたことが確認されている。しかし、自然環境の変化に伴い今は絶滅危惧種となつてしまった。中国では八一年に七羽の野生トキが発見され、営巣地での狩猟や森林伐採禁止などを盛った生息地保護政策を実施した。トキが繁殖する現場を实地調査した蘇氏は、トキが暮らすやすい環境と農業経営との両立が求められると強調した。トキのえさ場となる水田は、今は二毛作で冬季に畑となる所が増えたり、化学肥料を多く使ったりと時代の変化に連れ「有機肥料を使った農業への転換などを推進すべき」とした。

## 県条例施行1周年

# 里山保全へ誓い新た

### 木更津で記念フェスティバル

## 今後の取り組み探る

例の施行一周年を記念して里山フェスティバルが十四日、木更津市のかずさアカデミアパークで開かれた。市民団体が企画、運営する「里山シンポジウム」をはじめ、「里山活動体験」や「里山の市」などが展開し、行政、市民、関係団体が、横の連携と情報共有を目指した。



分科会、パネル討論会など、今後の取り組みを探った「里山シンポジウム」

シンポジウム実行委員の暮しの様子を基調として、大槻副知事の金澤博代表は「山をどう生かすか」と題し、「森林はもろい田畑やの保全・活用を取り組む。里山シンポジウム」が重要な役割を担っている。田んぼや森林所有の多い

ぼたトシヨウを取って遊んでいました。ものすごい郷愁を持ち、それを何とか取り戻そうというのがある。市民と行政、企業とのパートナーシップをどう築くか、これからのテーマ」と展望した。大槻副知事も「森の持つ人間に生かす力、森の味について説明した。参加者は十一の分科会に分れていき、話し、企業代表は「里山を環境の一部認識し、環境の一部認識し、経済的な対価がない、山に託すための、大槻副知事や子供たちによる、里山シンポジウム」が重要な役割を担っている。田んぼや森林所有の多い



除幕された。葉巻子知事や子供たちによる、里山シンポジウム

## 「リョウカ」かざり

### 里山シンポジウム

## 里山の現状と取組み議論

### 市民、行政、企業の連携必要

里山は、自然環境と人間の共生をテーマに、市民、行政、企業の連携を推進する。里山シンポジウムは、里山の現状と取組みを議論する。里山シンポジウムは、里山の現状と取組みを議論する。里山シンポジウムは、里山の現状と取組みを議論する。



熱心な議論が展開されたパネル

ちば・谷津田フォーラムが毎月観察会を行っている千葉市緑区下大和田の谷津田がヘリコプターから空撮生中継された。



かずさアカデミアパークで行われた「第1回里山シンポジウム」。堂本知事・大槻副知事を交えて、農林業、医療、芸術、生物など11分科会で、里山の価値や利用法などについて議論された。

## <事務局より>

ご寄付くださった方々

会誌 10 号発行以降、次の方々から合計金額 169,850 円のご寄付をいただきました。紙面を借りてご報告いたしますとともに厚く御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

(2004. 7.28 現在、50 音順・敬称略)

秋本靖匡，朝比奈隆，荒木佳子，井岡雅子，池竹則夫，石井星守，石崎千恵，伊藤純子，稲見慎三，植木啓美，瓜生達哉，江見照夫，遠藤陽子，大河内明美，大沢雅彦，太田慶子，岡野清美，小野鈴子，角川浩，川崎利男，川出直子，栗山秋男，小泉力，小林洋生，斉藤直子，榊原政芳，篠崎秀次，篠原和子，渋谷孝子，杉野光明，千葉一也，寺野淑子，内藤英世，中嶋拓子，永瀬洋子，中村俊彦，根本正之，花立良江，林理，平沢信夫，福田真由子，藤塚賢二，本忠正一郎，松下優子，南川忠男，宮沢友子，柳沢朝江，山田昌之，和田宏之

### 【ご寄付のお願い】

会誌 10 号発行から、今回も 49 名もの方から多額のご寄付をいただきました。ちば・谷津田フォーラムの運営費は、会員の皆様の寄付と助成金でまかなわれています。会の運営のため、今後とも引き続きご寄付いただきたくお願い申し上げます。

郵便振り込み口座番号：00120-0-187874 ちば・谷津田フォーラム

### 【原稿のお願い】

会誌に掲載する原稿を募集しています。谷津田保全に関する活動紹介や、多くの皆さんに知ってほしいことなど、投稿してください。原稿は、フロッピーか e-mail でいただけるとありがたいです。郵送の場合は下記の事務所へ、e-mail の場合は、次のアドレスをお願いいたします。

原稿送り先 (e-mail の場合) : QYK16306@nifty.ne.jp (田中)

顧問 (敬称略・50 音順)

石川 清 (社会貢献活動企業推進協議会代表)

岩瀬 徹 (千葉県生物学会副会長・千葉県立中央博物館友の会会長)

大沢雅彦 (東京大学大学院新領域創成科学研究科教授)

楠岡 巖 (四街道ユネスコ協会会長・四街道ライオンズクラブチャーターメンバー)

ケビン・ショート (東京情報大学教授、博物学・自然史ライター)

椎名益男 (ライオンズクラブ国際協会 (千葉県) 環境保全委員長)

高橋在久 (東京湾学会理事長)

中嶋拓子 (千葉県生活協同組合連合会顧問)

根本正之 (東京農業大学地域環境科学部教授)

組織・運営

- ・代 表：中村俊彦 (千葉県立中央博物館)
- ・副代表：岩田好宏 (千葉県自然保護連合副代表)、原慶太郎 (東京情報大学教授)
- ・事務局長：川本幸立
- ・会 計：小西由希子
- ・編 集：田中正彦、小西由希子、松下優子
- ・幹 事：調査研究・教育普及 (田中正彦、栗原裕治、小川かほる、小西由希子、網代春男、高山邦明、中村彰宏)

保全活動 (大槻憲昭、中野雅藏、高山齊一郎)



ちば・谷津田フォーラム会誌「里やまの自然誌」第 11 号

発行日：2004 年 8 月 30 日

発 行：ちば・谷津田フォーラム 〒260-0013 千葉県千葉市中央区中央 3-13-17 代表 中村 俊彦  
(月・水・金の 10:00~14:00 には事務所当番がおります)

TEL&FAX 043-223-7807 HP: <http://yatsuda.2.pro.tok2.com/>

編集責任者：田中 正彦、小西 由希子 イラスト：松下 優子 表紙写真提供：蘇 雲山

郵便振り込み口座番号：00120-0-187874 ちば・谷津田フォーラム